



2010年5月27日放送

がん患者の在宅緩和ケア～現状と課題～

在宅緩和ケアの充実を目指して

(いのちの森ねっとの取り組み)

穂波の郷クリニック院長 三浦 正悦

“コミュニティーケア”を通して地域に貢献する

医療法人心の郷、穂波の郷クリニック院長の三浦正悦です。

私のクリニックは宮城県仙台市の北約30キロの米どころ、大崎市古川にございます。すぐ郊外には田んぼや山々が連なり、豊かな自然の宝庫ですが冬は北風が冷たく強く厳しいところもあります。人口は約12万人です。穂波の郷クリニックは2005年（平成17年）7月7日にオープンし、新しい在宅ホスピス緩和ケアに取り組んでいます。

緩和ケアとはWHOの2002年の定義では次のようになっております。

「緩和ケアとは生命を脅かす疾患による問題に直面している患者とその家族に対して、疾患の早期に痛み、身体的問題・心理的社会的問題・スピリチュアルな問題に関してきちん

とした評価を行い、それが障害とならないように予防したり対処したりすることで、QOL（生活の質）を改善するためのアプローチである」

我々の在宅緩和ケアの実践を名付けて、コミュニティケアと呼んでいます。そしてコミュニティケアのリーダーとして緩和ケアコーディネーターを位置付けました。

緩和ケアコーディネーターとは希望の哲学をもって、命を支えあう仲間たちと手をつなぎ、「生きててよかった」を実現する緩和ケアの専門家であります。緩和ケアの理念を持って、緩和ケアプログラムを作っていきます。また、チームケアをコーディネートするつなぎ役でもあります。このコーディネーターは五感を駆使できる人でもあります。

2007年8月1日には医療法人心の郷が緩和ケアを目的に誕生いたしました。基本的なあり方は穂波の郷クリニックの行動理念より受け継ぎ、穂波の郷クリニックで看取った方々のメッセージが反映されるようにしました。このメッセージを私達が目指すべきケアの原点におくことで、勇気と知恵が無限につながり生命の蘇りに寄与し、ケアの文化を創造しながら地域に貢献していきます。

医療法人心の郷の理念をご紹介します。

- ① 医療法人“心の郷”は あきらめない、つながる、在宅を支えるを行動指針として、緩和ケアの実現に努める。
- ② 医療法人“心の郷”は 緩和ケアのプロセスを共有することによって、共感の絆を育むことに努める。
- ③ 医療法人“心の郷”は 生命（いのち）とかかわるすべての縁を大切にし、生命（いのち）が生まれた心の故郷（ふるさと）を尊重する。
- ④ 医療法人“心の郷”は “コミュニティケア”と“ケアの文化の創造”を通じて地域に貢献する。

以上のようになっています。

人の喜び悲しみや苦悩は一人一人異なります。緩和ケアにおいては心の苦悩・命を喪失することの苦悩＝いわゆるスピリチュアルペインをいかに解消していくかが大きな課題となっています。体の痛みは、緩和医療の進歩でモルヒネ等を使用することにより、かなりコントロール可能となってきました。最後にどうしてもスピリチュアルペインと向き合わざるを得ません。こんなはずではなかった、どうして自分だけがこんなに早く死に至る病にかかってしまったのだろうか？ コミュニティケアは緩和ケアコーディネーターがリードし、粘り強くあきらめないでかたくなな心や絶望の心に働きかけ、支えようとする仲間達とつながるよう知恵とアイデアを駆使いたします。そこにもたらされた安心から“つぶやき”を拾い上げ緩和ケアプロジェクトを組んで希望の実現につなげていきます。この繰り返しにより今日も生きてて良かったと思えるようになるのです。

この4年間、在宅緩和ケアにかかわってまいりましたが、毎年看取る命は60人にのぼります。最期の最期まで大好きなご自宅という願いをかなえる在宅死率は93%になります。ホームケアクリニック川越の川越厚氏は、望ましい在宅支援診療所はホスピスとしてのチ

ームやボランティア組織を持ち、こころのケア担当者がチーム内に存在する診療所であると述べていますが、穂波の郷クリニックは緩和ケア支援センターはるかを持ち、川越先生の述べているクリニックに相当すると思います。

コミュニティ緩和ケアの広がりを願って

緩和ケアチームのかかわりと目指すところをまとめてみました。病気の治療をするときには最初は医師と看護師中心に行いますが、緩和ケアが始まると、流れは静から動に変わり、生命の尊厳をもってかかわる日々のスタートが始まります。今までの穏やかな暮らしから、限りある命を意識しながら「生きててよかった」につながる心豊かな関係づくりを展開していきます。そこに必要なのが、悲嘆と絶望の心に寄り添い、つぶやきや願いを受け止めるチームリーダー的存在の緩和ケアコーディネーターであります。コーディネーターは、個人の人生を尊重し、医療・介護・家族・地域の人々を包括しながら、こころのやり取りを重ね、あきらめないで小さな喜びづくりに懸命に取り組みます。一つの展開が喜びにつながり、また新たな力が生まれ、周囲の力が後押しとなり自らの生きようとする力がよみがえってきます。

この現象は、次々と出会う人に感動を起こさせ、思いもよらない出来事を起こしたりします。いままきに輝きを増した命が織り成す“物語”が生まれてきます。緩和ケアプロジェクトの意味は深いものがあります。これらの日々の記録を綴り、心の記憶に重ねることで、尊い命から学ぶものを人々は感じるようになります。そこには苦悩を和らげる、いつもの医療スタッフの温かいまなざしがあってこそ実現可能となることを忘れてはなりません。命をいとおしむ心が以心伝心し、心置きなく喜怒哀楽を精一杯表現しながら、魂は安らぎの境地に向かっていきます。そこには感謝の心で満たされた自己の物語の完結編が創られていくのであります。

昨年12月、30代の子宮頸がんの患者さんを在宅で受け持ちました。二人のお子さんを持ち、人生これからというときの闘病生活でした。度重なる抗がん剤治療で傷つき、がんの広がりでも心も体も傷つき、すべての希望を失って両親の元にお世話になっての在宅緩和ケアのスタートでした。訪問診療を受けながら、彼女はひたすら両親や子供たちに心をかけました。とうとう歩けなくなりましたが、そのころに寄り添ってくれたのは、仕事をやめてそばにいてくれた母親と緩和ケアコーディネーターの大石春美さんでした。大石さんは二人のお子さんがサンタクロースを知らないを知り、緩和ケアプロジェクトが始まりました。お子さんはサンタさんに願いをこめたお手紙を書き、サンタクロースに届けてもらおうと私に持ってまいりました。5人のボランティアのサンタさんは「お母さんに子供たちの笑顔をプレゼントしたい」と懸命にハンドベルの練習をしたり、子供たちとのゲームを考えました。子供たちの待ちに待った12月25日、それも希望の時間に5人のサンタさんはプレゼントを持って訪問したのです。

「ワーッ、ママと同じゲーム機だ！　ありがとう、サンタさん！」

歓声が飛び交いました。続いて、練習してきたハンドベルの演奏です。

♪き～よし、この夜……

そして、「赤鼻のトナカイさん」。懸命なハンドベルの演奏です。

演奏が終わると子供さんたちは、「サンタさんとどこから来たの？」

「サンタさんの一人はなんと岩出山、もう一人は中国からだよ。さらにもう一人は古川」

みんな大笑いです。もうすっかり子供たちは打ち解けました。

「サンタさん、カードゲームをしよう」

「それでは、冬と関係のあるものは」

「雪だるま！」「もち！」「みかん!？」「あれ、こたつ！」「ねこ？」「え、ねこ？」

もうわいわいがやがや。部屋中に笑いが響き渡りました。

子供たちの喜ぶ姿と笑い声をにこやかにお母さんは見守りました。はじめての一家団欒のなかで、お母さんの心は穏やかにすべてを受け入れるようになっていきました。その心に残ったのは子供たちの笑顔とサンタさんの温かいところでした。12月31日、安らかに旅立たれました。

いまでも、我々のご家族のお付き合いが続いています。子供たちは我々の姿を見つけると本当にお友達のように近寄ってきます。

「サンタさん来年も来るかな？」「きっと来るよ！」

このように私は医師として病気の症状を改善するだけでなく、心の喜びを創り出すコミュニティ緩和ケアのできることに感謝申し上げ、いろいろな地域に広がりを持つことを願って、お話を終えたいと思います。

「総合メディカルマネジメント」

http://medical.radionikkei.jp/sogo_medical/bangumi.html